

2012 年 12 月 1 日発行 第 130 号

目 次	
P 1 巻頭言 「夢の実現へ向かって」	P 6 みなと区民まつり
P 2・4 講演会「日本外交と領土問題」	P 7 関東ブロック・ユネスコ活動研究会
P 5 スコットランドのクリスマス料理	P 8 事務局便り / 編集後記

夢の実現へ向かって

副会長 今村孝子



この度は、緊張する巻頭言執筆という場をあたえていただき、港ユネスコ協会とのかかわりについてふりかえる機会をいただきました。

高度成長のさなかにあって、企業戦士の夫に仕え 3 人の息子たちをかかえる母親としての日常は、日々の一人一人の生活にとことんつきあうことでした。数年の外国赴任生活を体験、思いがけない病気治療の期間をへて、世の中のいろいろなことを見聞することでこれからの我が家のあり方を模索していたように思います。

港ユネスコ協会の設立はそんな私の心を揺さぶり、国際性や社会性をなにより必要とする次世代の若者や親たちに刺激や示唆を与えました。

1982 年、設立の翌年に開かれた国際パネルディスカッション「80 年代国際社会における女性の生き方」の評論家広中和歌子さん、上智大学助教授の村瀬アンさん、国連難民高等弁務官事務所渉外担当官ヤン・ミンジャさんの 3 人の女性のお話はとても画期的であり、時代に先がけた魅力ある企画でした。つい誘われるままに入会し、新しい女性のあり方と国際化の風に吹かれたいと思ったことを思い出します。客観的な見方をさらに広げ、自律して考えることのできる人格を養う必要性を強く感じました。

国際交流、相互交流、相互理解を主眼に発進する港ユネスコ協会の活動は多岐にわたり、つぎつぎと企画される国際シンポジウム、講演会、国際交流ニューイヤー・フレンドシップパーティ、YFU 留学生やフィリピンの大学からの学生との交流会など、10 年、20 年、30 年とつづき、今、私が担当する世界の味文化紹介シリーズは来年早々 100 回を迎えます。また、地球人として共に生きるために助けあおうと、日本ユネスコ協会を通じて協力するコアアクション活動や識字支援活動は年間をとおして長い年月行われてきました。いつしか私もその中で、くんずほぐれつのボランティア活動に加わり、社会の沢山の先輩方や会員の方々とともに働き、合計 3 年間の事務局担当はかけがいのない経験となりました。

会長自ら編集にかかわられた 30 周年の記念誌には、いままで実施された事業がすべて網羅され、その重みは文字になって圧倒されますが、並々ならぬボランティアの力による汗の結晶はたいへん貴重であり、港ユネスコ協会の誇りであり宝になっています。一人ではできないことも、男女、年齢、国籍、学歴、経験のちがいを越えて人間力を結集し、知力・体力・時の運によってどんなにも素晴らしい実りになるというかけがえのない体験を次の世代にまで伝え、東日本大震災で浮き彫りになり世界に認められた日本人のすばらしさに誇りを持ちつつ、平和につながる活動が何とか世界に広がっていくことを願います。

国連のユネスコ憲章前文の初めに出てくる言葉「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和の砦を築かなければならない」を、これからもまず自分のモットーにし、まわりに伝えていく活動にしたいと思っています。

「日本外交と領土問題」

講師：東郷和彦 元駐オランダ大使

京都産業大学世界問題研究所長

日時 2012 年 9 月 28 日 (金) 18:30~20:30

会場 港区立生涯学習センター3 階 305 室



講師プロフィール

長野県生まれ。1968 年東京大学卒業後外務省に入省。

主にロシア関係部署を中心に勤務し、条約局長、

欧亜局長、駐オランダ大使を経て 2002 年退官。

その後ライデン大学、プリンストン大学、ソウル国立大学他で

教鞭を取る。2009 年ライデン大学で博士号。2010 年より現職。

主な著書：北方領土交渉秘話、歴史と外交、戦後日本が失ったもの、

Japan's Foreign Policy 1945-2009、日本の領土問題（共著）他

私どもがこの度の講演会を計画した今年 5 月頃には、領土問題がこれほどまでに急に深刻な状況になるとは考えていませんでした。

2012 年は、日本の隣国であり、それぞれの国との間に領土問題を抱えている国々、つまり、ロシア、中国、韓国のリーダーが一気に交代する年にあたります。国々のリーダーの交代にともなう今後の日本との関係などに、どのような変化が起こるのかと気になっています。

そこで、当港ユネスコ協会の理事で、領土問題の専門家であられる東郷和彦大使に講演をお願いしたところ、「敗戦から 67 年。日本は、直面する三つの領土問題に何れも解決できずにいる。そもそもなぜ、領土問題にこだわるのか、なぜ今のような『外交敗北』にいたったのか、三つの問題の本質はどう違うのか、問題解決の道はどこにあるのか、等について話しましょう。」と快くお引き受けくださいました。

なんとその後、竹島問題、引き続き尖閣問題に関するショッキングな映像がテレビに映り出され、新聞の 1 面に大きく報道されるという事柄が次々と起こりました。あらためて、日本中でこの領土問題や国境問題という隣国との大切で、微妙な関係を考えさせられる機会になり、また、あまりにも私たちはこれらの背景にある歴史問題や事実を知らないでいる、意識しないでいると気付いたように思います。

講演会は想定外のタイムリーなテーマになったというべきなのでしょうか。

それだけに、今回の講演会への関心が高まり、また、日々冷え込んでいく日中関係、日韓関係を心配してか、講演会当日は 60 名の定員を超える参加者が会場に来て下さいました。

東郷講師が作成された資料「日本の三つの領土問題（全く新しい世界に）」や、日本を取り巻く三つの領土問題に関する地図を参照しながらの、講師の熱弁が続き、2 時間があっという間に過ぎ去りました。

講師のお話は、次のような言葉で始まりました。

今日は「尖閣」「竹島」「北方領土」の順で話したい。この数か月で、日本の領土問題の現状は半端でない難しさとなり、全く新しい局面に入ったと考えている。

今年 2012 年 2 月に保阪正康氏（ノンフィクション作家、評論家）と共著で「日本の領土問題」という本

を出した。それは、私なりの危機感があったからである。

私は、外交官として北方領土に長く携わって努力を重ねてきたが、交渉は幾度もの挑戦と挫折を繰り返し、なかなか前に進まない。北方領土に対するフラストレーションが、このところ「竹島」と「尖閣」に向けられてきたような気がしていた。2012年には必要のない爆発が起きそうな可能性があるかと危惧していたが、世の中は、私の予想をはるかに超える悪い状況になってしまった。

私は1968年に外務省に入り2002年まで34年間仕事をし、その間のちょうど半分の17年を、対ソ連・ロシア関係の仕事に携わってきた。その中心は平和条約締結問題、すなわち北方領土問題であった。外務省退官後10年目に入ったが、政府とは全く離れた立場から、この問題のフォローをやめることができない。

尖閣問題と竹島問題は、直接に深く関与して外務省で仕事をしたことはなかったが、条約局条約課、外務大臣秘書官、条約局長の仕事をしていた時には、政府の公の立場がなんであるかを知り、時にはそれをふまえて仕事をする機会もあった。

退官後は、外務省在職中は殆ど触れることができなかったアジア問題について勉強してきたので、勢い、尖閣問題と竹島問題について勉強する時間も持つことになった。



そういう状況の中にも、「領土問題は誠に難しい」と、ほとほと考えてしまう。

その難しさは、おそらく、日本をとりまく三つの問題が、それぞれ違う背景、違う性質を持っており、それが絡み合っ、問題の本質がどこにあるのかを見ることができにくくし、複雑な難しさとなっているからだと思えるようになった。

まず、「領土問題」とはそもそも、何なのかを考えてみたい。

国際社会を形成する主要な主体は国家であり、国家は、自国の領域に対する排他的な主権を行使する。その主権は、地域的概念である領土と人的な概念である国民に対して行使される。国家は、領土と国民に対する権利と責任を負うのである。

領土問題は、国家が国家の責任において、その主権的権利によって、自国の領土を守り、または、取り返えそうとして、他の国と衝突することから発生する。

その衝突には、三つの側面があるのではないだろうか。

第一に、領土要求をする根拠としての「法的な側面」がある。日本人であれば、日本の立場が正しく、相手の立場が間違っているのだから、交渉によって、相手はその至らなさを認め、自分の要求を引き下げて欲しいと思うだろう。しかし、究極的には、相手も全く同じことを考えている。従って、法理の正しさによる問題解決は、極めて考えにくいと言えよう。

第二に、「政治的側面」を考えねばならない。結局のところ、もし領土問題に解決というものがあるなら、それは、交渉による双方の「政治的な合意」による以外にない。20世紀前半までの国際社会なら、武力行使という解決もありえた。けれども、少なくとも現在の日本が許容しうる問題の解決ということになれば、それは、双方が受け入れられる案による「政治的合意」しか、方法がない。そのような合意案は、紛争当事者の利益を反映し、その利益の配分は、国家間の力関係を反映したものにならざるをえない。

第三に、それぞれの国の歴史に密接に結びついた問題、すなわち、「歴史的側面」を持つということである。領土問題が、単なる国際法の問題ではなく、ましてや、力関係を反映した利益の配分の問題でもなく、それぞれの国の歴史に密接に結びついた問題、すなわち、「歴史的側面」を持つということ、つまり、領土問題は、歴史問題となりうると言ってもよいかもしれない。そして、領土問題が、歴史問題にかかわるナショナリズムと結びついた時、この問題を解きほぐし、何らかの解決に導くということは、極めて大きな困難が伴うことになる。

日本がかかえる三つの領土問題は、この三つの側面から考えてみても、わが国にとっての意義も、相手国との間でたどってきた経緯も、交渉の成功や失敗の原因も、目指すべき解決方法も、それぞれに違ってくる。これらの違いをきちんと識別することによってのみ、それぞれの領土問題について今なすべきことが見えてくるように思う。

これらの問題に対して、関係国が武力を使うことなく話し合いによって解決をはかるために、私は交渉にあたっての三つの行動原則を考えてきた。それらは、

1. 実効支配を変えようとする側は、実力を行使しないこと。
2. 実効支配している側は、少なくとも話し合いに応じること。
3. 信頼関係の構築に努めること。

講師は、尖閣問題、竹島問題、北方領土問題について、それぞれに關しての歴史的経緯と、現在の状況について詳細にわたる出来事をお話し下さいました。

以上のように、講師が「現在、いずれの領土問題もひじょうに難しい状況になっている」とおっしゃるうちに、これらの問題に関する講演の内容をまとめるのは、たいへんに難しいことだとわかりました。

詳しい講演の内容については、講師のお書きになった数々の著書を読んでいただいたらより良くご理解いただけたと思いますのでお勧めいたします。

講演中、参加者は固唾をのんで講師の話に聞き入り、質疑応答の時間も短くなってしまうほどでした。



司会の永野博理事が、「我々の知らないお話がたくさんあって、わくわくして伺いました。我々にとっては、なかなかこういうお話を伺う機会がないという意味でも、非常に貴重な時間だったと思います。今後こういう問題が出てくる時に、今日話をベースに考えると、とても有意義ではないかと思います。」と結ばれました。

終了後のアンケートに記載された感想のいくつかをご紹介します。

「本当に有意義な時間でした」「歴史がいろいろと絡んでいて難しいということがわかった」

「国内的視点と国際的視点とのギャップの大きさを痛感いたしました」

「国と国との間のバランスなどの背景などがよくわかった」

「新聞情報では得られない貴重な話を聞けて良かった」「日本の政治家の無能なことに今更ながら失望」

「タイムリーな講演会、有難うございました」「領土問題の根底にあるものが良く理解できた」

「日本人は領土問題にもっと関心を持たなければいけない」

また、東郷和彦大使に対する賞賛の声も多くありました。

「すべてのお話が面白かった」「講師が素晴らしかったです」

「日本外交の実態を明快に・率直に説明されたことに感銘を受けました」

「もう一度東郷先生の話を知りたい」等。

講演会の後も、深刻さを増し、溝が深まっているように見える難しい領土問題ですが、なんとか少しでも平和的な解決に向かうようにと祈らずにおられません。

(学術文化国際委員会担当常任理事 宮下ゆかり / プレティン担当 高井光子)

スコットランドのクリスマス料理

日時 2012年11月17日 (土) 12:00~15:30

会場 港区立男女平等参画センター4階料理室

講師 チャールズ・ベントレーさん (セント・アンドルーズ協会)

通訳兼アシスタント 牧野紀美子さん (同協会)

タータンのキルトを召され、ちょっとサンタさんに風貌の似たベントレーさん。

まずはスコットランド料理の特徴についてお話です。

もともとスコットランドでは当地でとれた素材、山や海の幸を大事に調理していたところへ、9世紀にヴァイキングがスモークキングという調理法をもってきたそうです。

さらに、16世紀にジェームス5世にフランスから嫁いできたマリー・ド・ガイズロレーヌが、仏人シェフを連れてきたりしたこと、フランス料理の影響を受けたとのこと。ワイルドさと繊細さがあるということでしょう。

あのよく知られているポリッジ（オートミールがゆ）や、ハギス（羊の腸詰）については、多くの方も聞いた、食したことがおありだと思います。

今回のメニュー

- (1) Cock-a-Leekie Soup (コッカリーキー・スープ) という、スコットランドの伝統的なスープ
- (2) Poached Salmon (ポーチド・サーモン) お魚料理
- (3) Scotch Trifle (スコッチ・トライフル) という、ドランブイ酒をたっぷり使ったデザート

(1) Cock-a-Leekie Soup (コッカリーキー・スープ): 大鍋に鶏肉、ベイリーフ、リーク（ない場合は長ねぎ）の緑色の部分を、塩コショウして1時間煮る。その後、米、リークの白い部分とプルーンを入れてさらに10分煮る。

(2) Poached Salmon (ポーチド・サーモン): まず、野菜のスープストックは、大鍋にスライスした玉ねぎ、ニンジン、セロリ、それにベイリーフ、パセリの茎、フレッシュディル、塩コショウを入れ30分煮る。さらに白ワインを加え20分煮て冷ます。鍋にサーモンフィレを並べ、できたスープストックを入れて煮る。皿に並べ、マヨネーズ、レモン、パプリカなどで飾り、添え野菜としてブロッコリーやマッシュポテトを添える。

(3) Scotch Trifle (スコッチ・トライフル): ガラスのボールの底にラズベリージャムを塗ったスポンジケーキを敷き、ドランブイ酒をたっぷりしみこませる。(ドランブイ酒とはモルト・ウイスキーをベースにしたリキュールで、スコッチ・ウイスキーがベース。)

オプションとしてアマレット・ビスケットを砕いてスポンジの上にかけてもよい。

この上にラズベリー、牛乳、砂糖、片栗粉からつくったカスタードをのせ冷蔵庫で冷やす。サーブ直前にホイップクリームと飾りアーモンドスライスをのせる。

通訳兼アシスタントの紀美子夫人の手際良い指導のおかげで、講師手作りのクリスマス・プディングまでもいただくことができ、早めのクリスマス料理を味わうことができました。

参加者からは、「楽しかった、コクのあるスープとポーチドサーモンはとても美味しかった、また参加したい」等々のご意見が寄せられました。ありがとうございました。

(世界の料理委員会 松崎加寿子)



2012年（第31回）みなと区民まつり

今年の区民まつりは10月6日（土）7日（日）、例年のように芝公園一帯で行われました。

幸いに、2日とも好天気に恵まれました。おかげで会場には大勢の皆さんが来られ、区民まつりは大いに盛り上がりしました。

港ユネスコ協会は、みんなの広場部会・テントNo. 29に参加しました。

港ユネスコ協会の活動を多くの方に知って頂けるように、委員会ごとに工夫して作成したパネルを展示するとともに、協会の紹介チラシや行事の案内チラシを配布しました。

ミニバザーは渡部俊子常任理事及び会員の皆さんのご協力で行ないました。

また、東日本大震災子ども支援募金活動も行いました。ミニバザー売上金と募金額は、ユネスコ協会就学支援奨学金として、日本ユネスコ協会連盟へ送金されました。



6日（土）には武井雅昭港区長が港ユネスコ協会のテントに挨拶に立ち寄って下さいました。

また笠原正子さんと友人3人で日本文化の紹介を兼ねて、抹茶・干菓子をテントに来られた区民の皆さんにサービスしました。



10月25日（木）港区役所11階レストラン「ポート」でみんなの広場部会の反省会を兼ねた懇親会がありました。渡部常任理事・北岡が出席しました。

皆さん、ご協力ありがとうございました。

（区民まつり委員会 委員長 北岡修）



UNESCO とは



国際連合教育科学文化機関のことです。

「教育」「科学」「文化」は、ユネスコの名前に込められた、平和を目指すキーワードです。

UNESCO とは、第2次世界大戦の反省から、「二度と戦争を繰り返さない」という決意のもと、1946年11月、国連の専門機関として誕生しました。

そしてその翌年、市民によるユネスコ運動が、世界に先駆けて仙台で始まります。

公益社団法人日本ユネスコ協会連盟は、UNESCO と連帯して、人びとの心の中に「平和のとりで」を築く活動を進める NGO です。港ユネスコ協会は日本ユネスコ協会連盟の1員です。

2012 年度 関東ブロック・ユネスコ活動研究会 in いばらき 報告

持続可能な社会の構築のために

「築こう、心の中に平和のとりでを」 —— 地域からの発信

- 日程 10月13日（土）（会場：つくばカピオ・ホール）
- 12：20～12：50 オープニングイベント 歌唱「つむぎの里」「千羽鶴の祈り」「ユネスコの歌」
 - 13：00～13：40 開会式
 - 13：50～14：50 基調講演「世界遺産 40 年の歩みと展望」
 - 15：00～16：40 パネルディスカッション「世界遺産・無形文化遺産は地域の宝物」
 - 16：50～18：00 日本ユネスコ国内委員会報告
公益社団法人日本ユネスコ協会連盟報告
 - 18：30～20：30 交流会（会場：国際会議場第ホールホワイエ）
- 10月14日（日）（会場：つくば国際会議場）
- 9：00～10：30 【分科会】第1分科会：「平和の文化」実践活動
第2分科会：世界寺子屋運動
第3分科会：世界遺産・地域遺産活動
第4分科会：青年部活動
 - 10：40～11：40 閉会式
 - 13：00～ エクスカーション「筑波宇宙センター（JAXA）見学ツアー」



茨城県つくば研究学園都市で開催された、2012 年度 関東ブロック研究会へ 2 日間参加してまいりました。

基調講演のテーマは、「世界遺産 40 年の歩みと展望」で、講師は筑波大学大学院・人間総合科学研究科・世界文化遺産学専攻教授 日高健一郎氏でした。

「世界遺産条約」は、第 2 次大戦による歴史的建築物の被災・滅失の反省から誕生し、1972 年ユネスコ総会で採択され、遺跡、景観、自然など、人類の共有すべき「顕著な普遍的価値」をもつものが世界遺産の対象です。この 40 年間に多くの文化遺産、自然遺産の登録と保護、および危機的遺産の救済の制度的基盤となってきました。2012 年現在、その数は 972 件で、国別、多い順番に、イタリア（47 件）、スペイン（44 件）、中国（43 件）、日本は 14 位（16 件）。世界中の人々が人類共通の遺産を保護しようと認識することで、世界遺産が平和の実現に貢献できる可能性があると言われました。興味深い講演でした。

2 日目の 4 分科会では、各自が自分の関心のある分科会に参加しましたが、それぞれの協会が行う、地域に密着したさまざまな活動の様子が報告されました。当協会のように事務局を区から提供され恵まれたところがある一方で、事務局がなく、会員が自宅で準備をしているという厳しい現実のユネスコが多いとわかりました。



左の写真は交流会で撮った、茨城県滞在中のネパールの学校の女性の校長先生です。この校長先生が壇上で、日本ユネスコ協会連盟からの援助に対して御礼の言葉を述べられたのがとても印象的でした。

また、大学のユネスコクラブの報告も熱心で、次回も楽しみにしたいと思います

最後のプログラムであるエクスカーションの、筑波宇宙センター（JAXA）見学ツアーにも、またこのネパールの先生とご一緒させて頂きました。

関ブロ研究会に参加して、他のユネスコ協会の皆様にもお話ができて、改めてユネスコ活動の意義を考える機会になりました。
(会員 佐藤律子)

事務局便り



【今後の行事予定】（詳細は別途、チラシやホームページでご案内いたします）

- ☆1月8日～3月26日 英会話中級クラス 毎火曜日 18:30～20:30 コース全12回
講師：マーク・マードック先生 会場：港区立リーブラ(田町)
- ☆1月9日～4月3日 英会話初級クラス 毎水曜日 18:30～20:30 コース全12回
講師：マーク・マードック先生 会場：港区立麻布区民センター
- ☆1月25日（金）18:30～20:30 国際理解講演会 テーマ「学長室から見た日・米大学の違い」
講師：ブルース・ストロナク博士（テンプル大学・ジャパンキャンパス学長）
使用語：英語（日本語逐次通訳付き） 会場：港区立生涯学習センター305号室
- ☆1月26日（土）13:30～16:00 茶の湯体験教室 会場：港区立生涯学習センター203号室
- ☆1月27日（日）12:00～14:30 会員新年会 会場：「グリフォン」（港区白金台3-18-12）
- ☆2月12日（火）15:00～16:30 デプロマツ・レクチャー（在京各国大使と大使館員のみ可）
講師：外務報道官 横井 裕氏 会場：国際文化会館

【ご寄付 ありがとうございました】

(A) 日本ユネスコ協会連盟の東日本大震災子ども支援募金（就学支援奨学金として）日ユ協連へ送金。

- ☆9月28日 国際理解講演会「日本外交と領土問題」 会場での募金 16,900円
- ☆10月6～7日 みなと区民まつり（ミニバザー:¥13,196、抹茶呈茶:¥1,042） 14,238円
- ☆11月13日 シンポジウム「これからの私たちの暮らし」 会場での募金 5,500円

(B) 「ミンダナオ子ども図書館」へのご寄付

寄贈品：Tシャツ、ブラウス、スカート、スラックス、上着、肌着、
バスタオル、タオル、シーツなど、合計79点

寄付者：岩田昭子様、大崎マキ子様、奥村和子様、高井光子様、永井美智子様



【日ユ協連・東日本大震災子ども支援募金】 常時受け付け中。

【ミンダナオ子ども図書館への寄贈品と支援金】 常時受け付け中。

衣料品は子供用、大人用を問いません。新品あるいは中古品（洗濯済）（除・毛織物衣料と学用品）。
軽量の日用品なども可。事務局までお持ち込み、あるいはご送付下さい。

おめでとうございます。NGO「ミンダナオ子ども図書館」の館長・松居 友氏が2012年10月、第3回
自由都市・堺平和貢献賞の奨励賞を受賞されました。

ユネスコ協会事務局（火～金 10:30～17:30）

〒105-0004 東京都港区新橋3-16-3 TEL 03(3434)2300 TEL・FAX 03(3434)2233

Eメール：info@minatounesco.jp ウェブサイト：<http://minato-unesco.jp/>

事務局は12月27日（木）から1月7日（月）まで年末年始休みとなります。

■ 編 | 集 | 後 | 記 ■

◆先日、「自殺大国」日本の不十分な取り組みに警鐘を鳴らすドキュメンタリー映画を観る機会があった。これを制作したのは都内在住の外国人の友人で、15年前に来日して以来、すっかり日本が好きになり、今後ずっと留まる気持であるという。この問題に強い関心をもつごく少数の友人と協力して、本業の傍ら、3年がかりでこうした映画を完成させてしまう彼の高いモチベーションと実行力には圧倒される。日本の人々がこの問題にもっと危機感を共有し、メンタルヘルス面の理解・施策を拡充するなど、「なんとかしなくては！」という彼の熱いメッセージが伝わってきた。（棚橋 征一）

◆活動は楽しくなければ、続かない。半年経って、つくづく思います。せめて、楽しげにやりましょう。（富田晴雄）

◆ノーベル賞に輝く山中伸弥教授の柔らかな関西ことばは、関西人の私の耳には心地よい。朝日新聞のザ・コラムで、「山中教授の話術が最もさえるのは米国であり、教授の名演に聞き入っていると英語まで関西風に響くから不思議だ」という意見に、北海道大学・山下好孝教授は、「関西話法では原則、一文を高低高低高低と音調を上げ下げしながら進む。共通語は、低高低低低低と音調が『へ』の字形に下がっていく。聞く人が聞けばこの英語話者は関西出身やな、と見当がつく」と解説している。すると、関西人はどこの国の何語を話しても、やはり関西風なのでしょうか？（高井光子）